

3-2 旧石器時代の埋葬：白保竿根田原洞穴遺跡の埋葬行為を考える

佐藤宏之（東京大学）

1 はじめに

白保竿根田原洞穴遺跡から出土した旧石器時代の化石人骨は 1,100 点以上に上り、現時点で少なくとも最小個体数にして 10 個体以上となる可能性が高い。その中には、頭骨から体部・四肢骨にかけての解剖学的な結合状態を復元可能な複数の個体（1 体は屈葬）が含まれており、①人骨から直接得られた放射性炭素の較正年代が 27-20ka に集中すること（更新世）、②人骨が 5 箇所程度の平面的なまとまりをもって出土すること（墓域を形成）、③洞窟形成に関する堆積学や地質学・地球科学的証拠から、レスを主体とする成層堆積物中に人骨が包含されていること（流れ込み等による二次堆積ではない）、④人骨付着物（石灰質膠着物）や人骨に見られる動物の噛み跡等の観察から、人骨が一定程度の期間暴露された状態にあったこと、⑤石器等の道具や生活痕跡を示す遺構等がなく、明瞭な居住活動の痕跡が認められないこと等の各種の証拠からは、遺跡が風葬（崖葬墓）等の墓域を形成していた可能性がきわめて高い。

旧石器時代における墓域を伴う複数個体の埋葬（風葬等）例は、日本列島では初めて検出されたことになるが、こうした特徴は世界的に見て特異な事例なのであるか。本稿では、その点について、世界の旧石器時代における埋葬行為の研究事例を概観し、その評価を試みたい。

2 最初の「埋葬」：前期旧石器時代

そもそも埋葬行為を考古学的に確認することは容易ではない。アウストラロピテクスや初期ホモ属が出土するアフリカでは、肉食獣による捕食の結果として残された化石人骨例が著名であるが、そうした行為によらないと推定される人骨もあり、何らかの広義の「埋葬」行為の結果と積極的に解釈する例もある（Pettitt 2001）。しかしながら、具体的にその存在が主張された最古の事例は、おそらくスペインのシマ・デ・ロス・ウエソス洞窟遺跡の事例であろう。同遺跡では、ホモ・ハイデルベルゲンシス（400-350ka）が、洞窟の入り口付近にある深さ 14m の縦穴の底部から、28 体が折り重なるように出土した。調査者のアルスアガは、ハイエナ等から死体を守るために縦穴に意図的に投棄し、「予定された正確な場所に遺体を < 積み上げた >」世界最古の埋葬慣習であると主張している（アルスアガ 2008; 佐藤 2014）。また最近調査された南アフリカのライジング・サン洞窟遺跡でも、ホモ・ナレディと新たに定義された初期ホモ属が同様な方法（意図的廃棄）で「埋葬」されたと報告された（Berger et al. 2015; Dirks et al. 2015; シュリーブ 2015）。

最初の「埋葬」は、仲間の死体を動物の捕食から隔離して「守る」という意識から始まったのかもしれない。

3 ネアンデルタールと早期ホモ・サピエンスの埋葬：中期旧石器時代

ヨーロッパや西アジアを中心に、ネアンデルタール人の全身骨が洞窟等から単独で出土する例は比較的多く報告されている。これらには「墓穴」を伴う例もあるが、そうした施設がない例も普遍的に観察される。ネアンデルタールの化石人骨の出土例は 300 近くにのぼるが、このうち少なくとも 30 例以上は、埋葬の可能性が高い。

ネアンデルタール人の埋葬例では、明確な副葬品がともなわないとされているが、西アジア・レヴァントのアムッド洞窟遺跡から検出されたアムッド 7（80-50ka）では、アカシカの上顎が骨盤付近から検出されている。

現生人類の出現が 20 ～ 15 万年前のアフリカにあることはすでによく知られているが、最古の現生人類の埋葬例は、アフリカではなく西アジアのレヴァントから報告されている。代表的な早期ホモ・サピエンスの化石人骨を出土したスフル遺跡とカフゼー遺跡からは、それぞれ 10 と 13 個体に及ぶ全身骨格が出土した。スフルではそのうち 4 個体が、浅い墓坑を伴うと推定されており、他の個体の多くも自然の窪み

を利用していたと考えられている。このうちスフル5 (100-30ka) ではイノシシの下顎骨が、カフゼー11 (120-90ka) ではダマジカの角が人骨に伴う形で検出されている。多くの個体は屈葬とされる。ただし装飾品等の明瞭な副葬品の存在は、現生人類が出現する後期旧石器時代以降となる。

かつて現代的行動性を高く評価するあまり、ネアンデルタールの「墓」は、肉食獣から居住地を守るために死体を処理しただけであると主張されたきた (ストリンガー・ギャンブル 1997) が、現在では解剖学的位置を保った全身骨の出土をもって「埋葬」の可能性を考慮することは広く了解されており、墓穴の普遍的存在に先行して埋葬行為が行われていたと考えられる (Akazawa & Muhsen 2002; Pettitt 2001)。

4 現生人類の埋葬：後期旧石器時代

レヴァントの早期ホモ・サピエンスの埋葬例ではすでにその萌芽 (動物骨・角の副葬) が見られるが、装飾品等の明瞭な副葬品を伴う墓坑への埋葬は、後期旧石器時代初頭から認められる。ヨーロッパではオーリニャック文化 (40 ~ 34ka) から開始されているが、頭部や着衣を多数の装飾品で飾り、多くの副葬品を伴う埋葬が発達するのは、後期旧石器時代中葉のグラベット文化 (34 ~ 25ka) である。

グラベット文化は、氷期の寒冷気候のもとでユーラシア北部の草原や疎林に展開した文化であり、マンモスやウマ等の大型獣狩猟に適応した集団によって、西ヨーロッパから南シベリア (東方グラベット) まで広く分布していた。東ヨーロッパからウクライナにかけての地域では、マンモス骨を利用した住居を構築したことも知られており、各種のヴィーナス像や骨角製装飾品が発達した。墓坑からは、単独または血縁関係が窺われる複数個体の全身骨格が検出されており、屈葬が多いが伸展葬もある。しばしば遺体の上には大量のオーカーがまかれるため、墓全体が赤く染まって見えることもある。特別に選択された地中海産の貝殻やオオカミ・キツネ等の歯牙に尖孔を施したネックレス、線刻・点刻のあるプレスレット、マンモスの骨や牙に抽象的な線刻・点刻や動物文様を施した装飾品、石器・石刃等が副葬されていることが多い (佐藤 2014)。

中期旧石器時代までの埋葬は、主として洞窟が選ばれていたが、後期旧石器時代になると、洞窟・岩陰だけではなく、平地も選択されるようになる。

5 東アジア・東南アジアの旧石器時代埋葬例

しかしながら、グラベット文化のような北方狩猟民の間で著しく発達した埋葬は、アジアの後期旧石器時代では、それほど厚葬を見せることはない。が、顔料の使用、副葬品、墓坑、埋葬儀礼といった諸要素を看取できる例もある。

東・東南・南アジアの後期更新世化石人骨は、中国国内を始めボルネオのニア洞窟、スリランカのファ・ヒエン洞窟やバタドンバ・レナ洞窟等から出土しているが、その多くは部分骨であるため、埋葬行為の有無は判断しがたい。しかしながら、中国北京郊外にある著名な周口店山頂洞 (山頂洞人) 近くにある田園洞から、後期旧石器時代初頭の年代測定値 (34,500 ~ 44,000cal BP) を有する現生人類の略全身骨格が出土しており、おそらく埋葬行為によるものと思われる (Shang & Trinkaus 2010)。

オーストラリア最古の埋葬は、南東オーストラリアのマンゴー湖遺跡群のひとつウィランドラ遺跡で確認されている。ウィランドラからは 200 個体以上の人骨が検出されているが、40ka 頃の若い女性と推定されている全身骨格 WLH1 と、43ka 頃の老齢個体 (おそらく女性) と考えられている WLH3 の 2 例のみがよく分析されている。WLH3 は遺体の上にオーカーを振り撒いた墓坑から出土しており、墓域が形成されていたのかもしれない (図版 84) (Johnston et al. 1998; 佐藤 2011)。

マレーシアのグア・グヌン・ルントウ洞窟遺跡から、13ka と年代測定

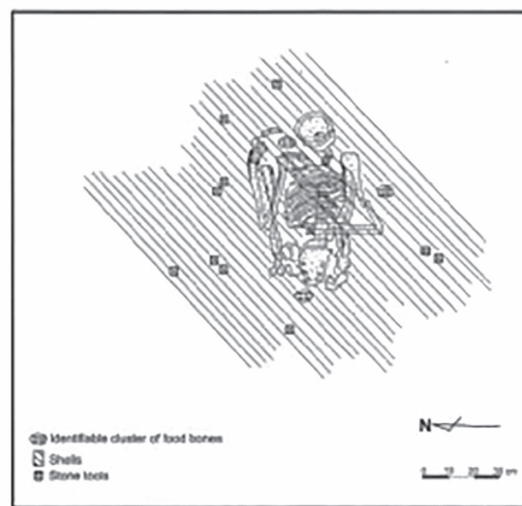


図版 84 マンゴー湖遺跡群
WLH3 の出土状況
(Hiscock 2008 より)

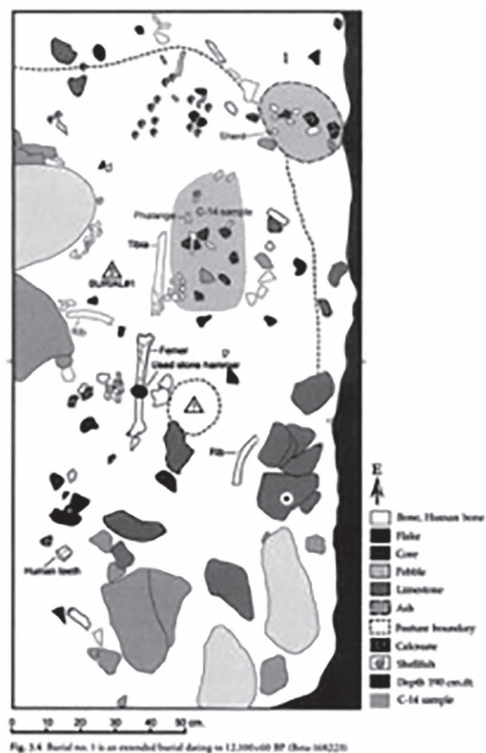
されたペラク人と呼ばれる屈葬の全身骨格が出土している（第100図）。明瞭な墓坑は認められていない。埋葬人骨の周囲からは、ヘマタイトの顔料が付着した石皿と磨石（敲石）、石斧等の石器や礫、イノシシ・トカゲ・シカ・サル等の動物骨や貝が出土しており、何らかの葬送儀礼が執り行われていたと推定されている（Majid 2005）。またタイのタム・ロッド岩陰遺跡からは、ほぼ同じ年代値を示す3個体の化石人骨が検出されている。このうち2個体はほぼ全身骨格が遺存しており、骨の放射性炭素年代は、個体1が $12,100 \pm 60\text{BP}$ 、個体2が $13,640 \pm 80\text{BP}$ であった。個体1は伸展葬の成人で、敲石と淡水・陸生貝が副葬され（第101図）、個体1の直下から出土した成人女性の個体2は屈葬で、遺体の直上にはサークル状に3つの礫が配置され、やはり敲石と動物骨が副葬されていた（第102図）。Burial と報告されているが、明確な墓坑は認められない（Shoocongdej 2006、2008）。

6 白保竿根田原洞穴遺跡の埋葬

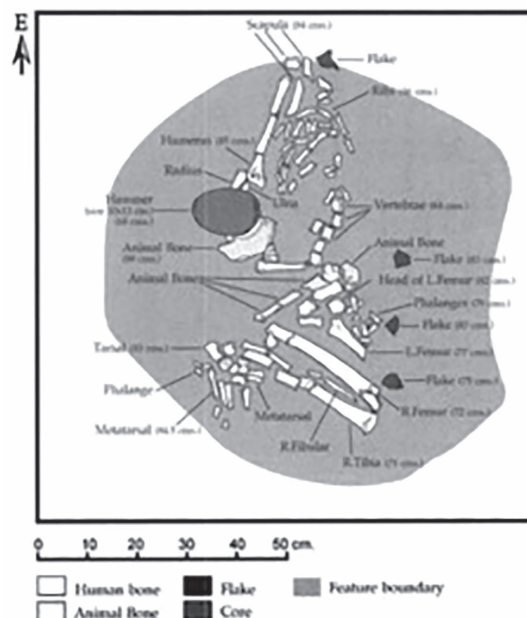
旧石器時代の埋葬例を検討してみると、白保竿根田原洞穴遺跡の後期旧石器時代埋葬例が、決して特異ではないことがわかる。墓坑埋葬が普遍化したグラベット期においても、必ずしも墓坑に埋葬しない例は多数あり、副葬品の伴出も必然ではない。しばしば複数個体の同時埋葬も見られることは、白保の化石人骨ユニットの存在を肯定的に捉えられることを示している。東南アジアにおける更新世埋葬例には伸展葬も屈葬もあり、しばしば自然礫が周囲に配置されているが、白保の場合それを認定することは困難である。周囲に分布する動物骨が、儀礼行為の所産ではなかったと否定することも難しい。またこれらの埋葬例では、多くが洞窟または岩陰に墓坑を伴



第100図 ペラク人の出土状況（Majid2005より）



第101図 タム・ロッド岩陰遺跡から出土した個体1
（Shoocongdej 2006より）



第102図 タム・ロッド岩陰遺跡から出土した個体2
（Shoocongdej 2006より）

わないで埋葬されており、白保例と共通する。一方、上述した埋葬例では、遺体を一定期間暴露する風葬のような行為があったかどうかまでは確認できない。これは、本遺跡で採用された人骨付着物の分析や人骨表面の詳細な意図的観察等の分析がなされていないことに起因すると思われるので、今後の調査が必須となろう。

以上のことから、白保竿根田原洞穴遺跡における墓域を伴う後期旧石器時代の複数個体埋葬は、世界の多様な旧石器時代埋葬慣行の中に十分位置づけることが可能である。

〈引用・参考文献〉

- アルスアガ, J.L. [藤野邦夫・岩城正夫訳] 2008 『ネアンデルタール人の首飾り』新評論
- 佐藤宏之 2011 「オーストラリア大陸への人類の移住」『旧石器考古学』75号、101-108頁
- 佐藤宏之 2014 「考古学から見た死と儀礼」秋山聡・野崎歓編『死者との対話』93-107頁、東京大学出版会
- シュリープ, J. 2015 「眠りから覚めた謎の人類」『ナショナル・ジオグラフィック』10月号、36-61頁
- ストリンガー, C.・ギャンブル, C. [河合信和訳] 1997 『ネアンデルタール人とは誰か』朝日新聞社
- Akazawa, T. and Muhesen, S. (eds.) 2002 Neanderthal Burials : Excavations of the Dederiyeh Cave, Afrin, Syria. International Research Center for Japanese Studies.
- Berger, L.R., Hawks, J., Ruitter, D.J., Churchill, S.E., Schmid, P., Deleuzene, L.K., Kivell, T.L., Garvin, H.M., Williams, S.A., DeSilva, J.M., Skinner, M.M., Musiba, C.M., Cameron, N., Holliday, T.W., Harcourt-Smith, W., Ackermann, R.R., Bastir, M., Bogin, B., Bolter, D., Brophy, J., Cofran, Z.D., Congdon, K.A., Deane, A.S., Dembo, M., Drapeau, M., Elliott, M.C., Feuerriegel, E.M., Garcia-Martinez, D., Green, D.J., Gurtov, A., Irish, J.D., Kruger, A., Laird, M.F., Marchi, D., Meyer, M.R., Nalla, S., Negash, E.W., Orr, C.M., Radvcic, D., Schroeder, L., Scott, J.E., Throckmorton, Z., Tocheri, M.W., VanSickle, C., Walker, C.S., Wei, P.P., Zipfel, B. 2015 Homo naledi, a new species of the genus Homo from the Dinaledi Chamber, South Africa. eLife, 4, doi : 10.7554/eLife.09560.
- Dirks, P.H.G.M., Berger, L.R., Roberts, E.M., Kramers, J.D., Hawks, J., Randolph-Quinney, P.S., Elliott, M., Musiba, C.M., Churchill, S.E., Ruitter, D.J., Schmid, P., Backwell, L.R., Belyanin, G.A., Boshoff, P., Hunter, K.L., Feuerriegel, E.M., Gurtov, A., Harrison, J. du G., Hunter, R., Kruger, A., Morris, H., Makhubela, T.V., Peixotto, B., Tucker, S. 2015 Geological and taphonomic context for the new hominin species Homo naledi from the Dinaledi Chamber, South Africa. eLife, 4, doi : 10.7554/elif.09561.
- Hiscock, P. 2008 Archaeology of Ancient Australia. Routledge.
- Johnston, H., Clark, P., and White, J.P. (eds.) 1998 Willandra Lakes : People and Paleoenvironments. Archaeology in Oceania, 33(3).
- Majid, Z. (ed.) 2005 The Perek Man and Other Prehistoric Skeletons of Malaysia. Penerbit Universiti Sains Malaysia : Pulau Pinang.
- Pettitt, P. 2011 The Palaeolithic Origins of Human Burial. Routledge.
- Shoocongdej, R. 2006 Late Pleistocene activities at the Tham Lod Rockshelter in Highland Pang Mapha, Mae Hong Son Province, Northwestern Thailand. Bacus, E.A., Glover, I.C. and Pigott, V.C. (eds.) Uncovering Southeast Asia's Past : Selected Papers from the 10th International Conference of the European Association of Southern Asian Archaeologists, pp. 22-37, National University of Singapore.
- Shoocongdej, R. 2008 Archaeological Heritage Management at Ban Rai and Tham Lod Rockshelters in Pang Mapha District, Mae Hong Son Province, Northwestern Thailand. Mae Hong Son Province : Silpakorn University.
- Shang, H. and Trinkaus, E. 2010 The Early Modern Human from Tianyuan Cave, China. Texas A&M University Press.